

茶業及びお茶の文化に係る現状と課題

令和 6 年 1 1 月

農林水産省

目次

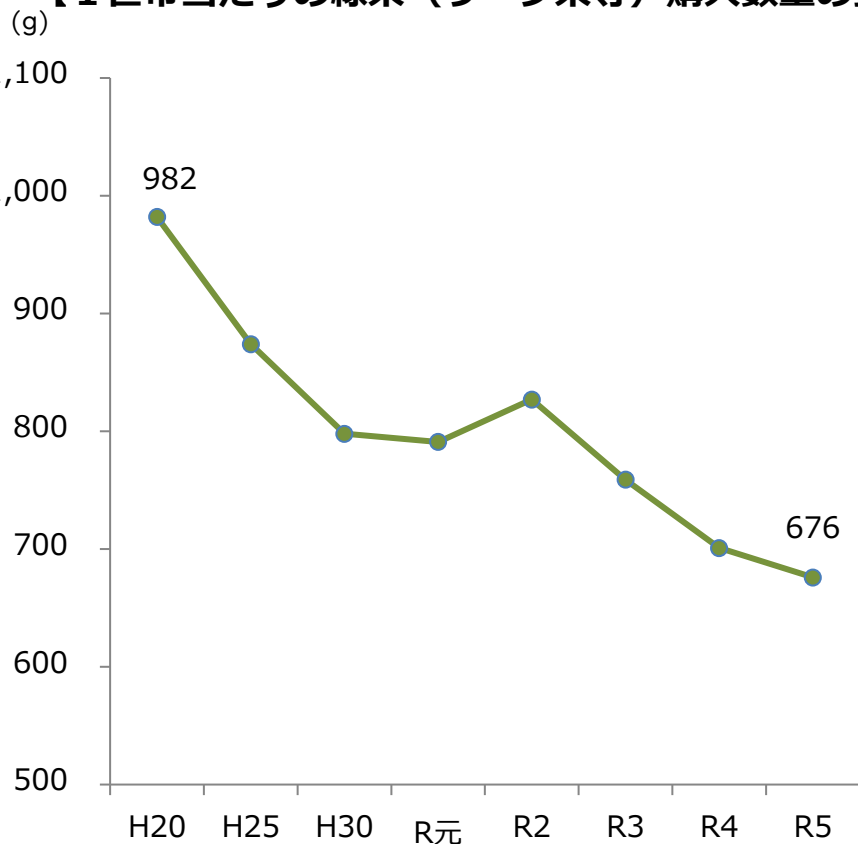
I	茶の生産・流通・消費等の現状	
1-1	国内消費動向（消費量）	1
1-2	国内消費動向（支出金額）	2
2-1	輸出動向（海外需要）	3
2-2	輸出価格	4
2-3	輸出実績の国・地域別内訳	5
2-4	輸出拡大に向けた政府の取組	6
2-5	日本茶の輸出産地形成に向けた取組	7
2-6	輸出向けの有機栽培（有機 J A S）茶の拡大	8
3-1	茶の生産量	9
3-2	茶の栽培面積・栽培農家戸数	10
3-3	茶の経営体の減少及び基幹的農業従事者の高齢化	11
3-4	茶農家の経営規模拡大	12
3-5	基盤整備・農地集積の推進	13
3-6	茶の労働時間・作業の機械化	14
3-7	茶期ごとの生産量・価格の変化	15
3-8	茶種ごとの生産量・価格の変化	16
3-9	てん茶生産量の増加	17
3-10	茶加工施設の整備状況	18
3-11	荒茶工場数の推移・省エネ化	19
4	お茶に関する文化財の保存・活用	20
II-1	茶業の抱える課題の整理	21
II-2	基本方針の検討の方向性	22
III	参考資料	23

I 茶の生産・流通・消費等の現状

I-1-1 国内消費動向（消費量）

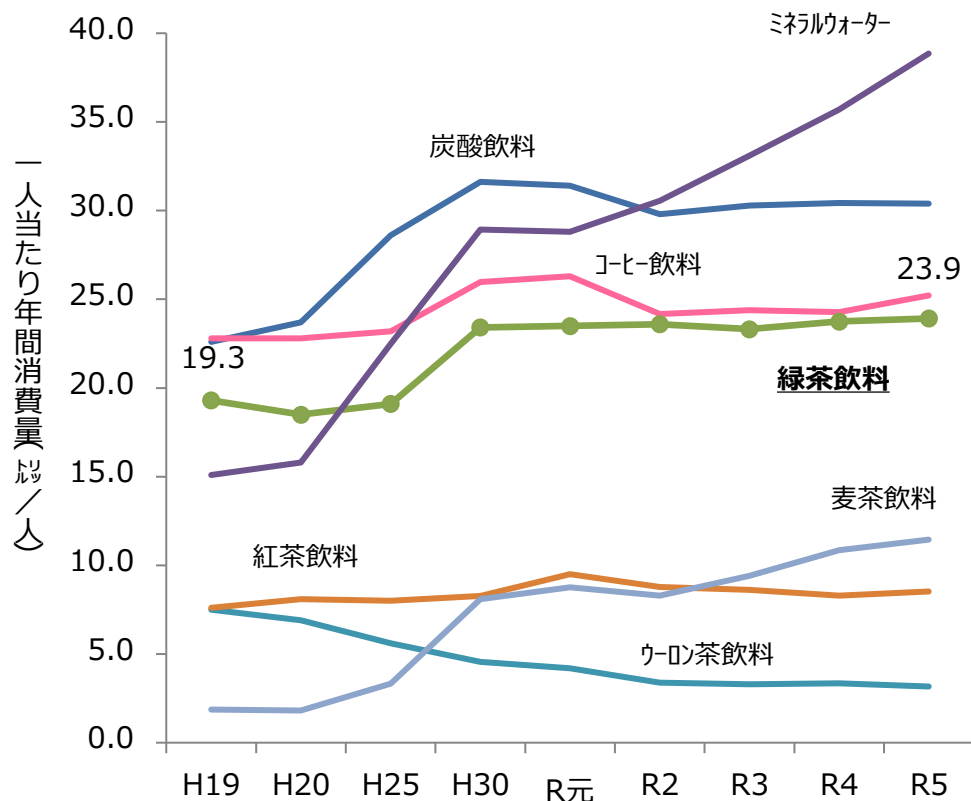
- **1世帯当たりの緑茶（リーフ茶等）購入数量**は、平成20年と比較して約**3割減少**。
- 一方、清涼飲料等のうち緑茶飲料の国民1人当たりの年間消費量は約**2割増加**している。

【1世帯当たりの緑茶（リーフ茶等）購入数量の推移】



資料：総務省家計調査

【清涼飲料等の消費量の推移】

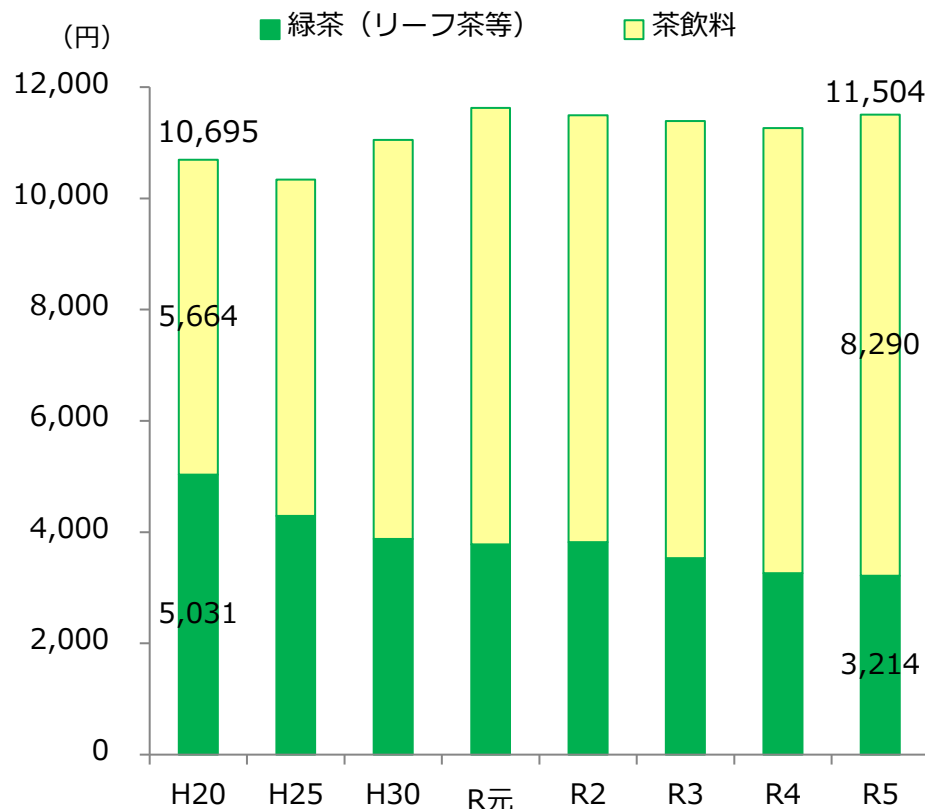


資料：(一社)全国清涼飲料連合会、総務省人口推計

I - 1 - 2 国内消費動向（支出金額）

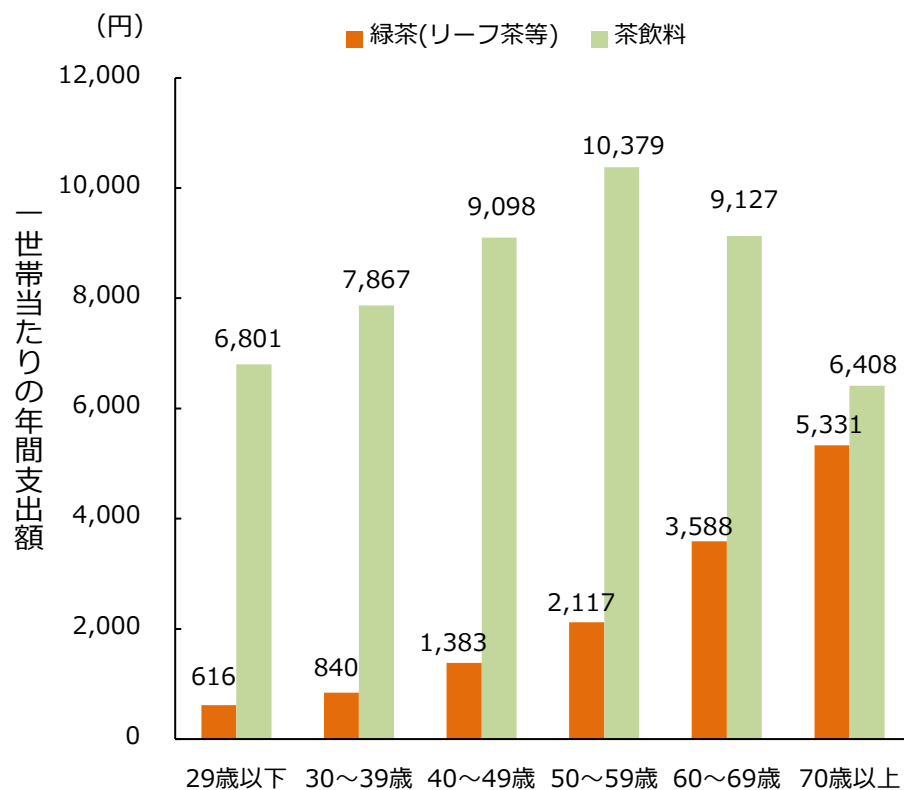
- 1世帯当たりの緑茶・茶飲料の年間支出金額は、近年は**11,000円程度で横ばい**であり、**緑茶（リーフ茶等）で減少**（平成20年比64%）している分、**茶飲料が増加**（同146%）している。
- 年齢別1世帯当たりの年間支出額は、**茶飲料で50～59歳をピークに減少**する一方、**年代が高いほど緑茶の支出額が大きい**特徴。

【1世帯当たりの緑茶（リーフ茶等）・茶飲料の年間支出金額】



資料：総務省家計調査

【年齢別の緑茶（リーフ茶等）と茶飲料の消費動向（令和5年）】

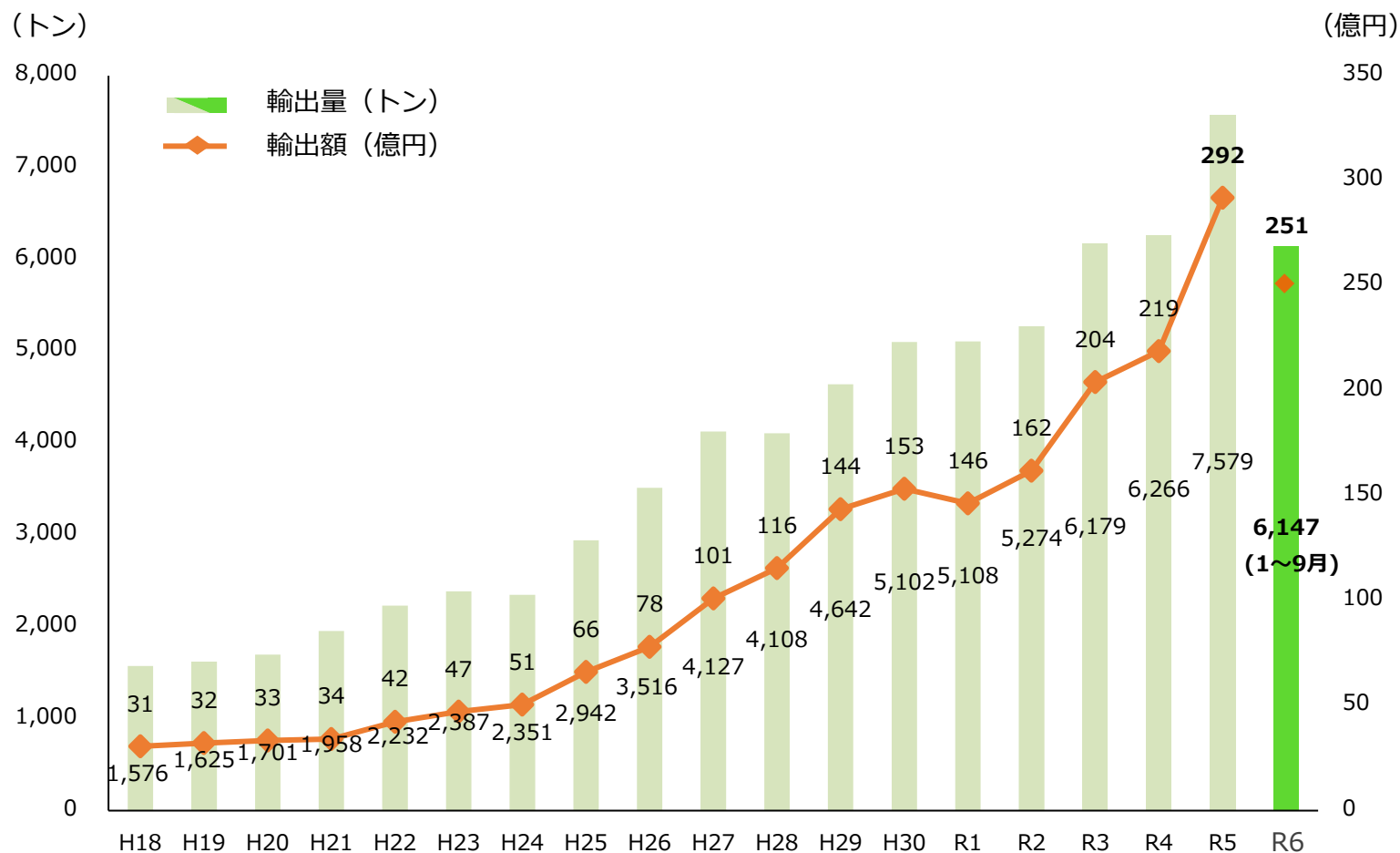


資料：総務省家計調査

I - 2 - 1 輸出動向（海外需要）

- 米国やEU等における健康志向や日本食への関心の高まり等を背景に、輸出額は大きく増加。2025年（令和7年）輸出額目標は312億円としているところ、**令和5年の輸出額は過去最高の292億円を記録**。令和6年も1月から9月の輸出額が**251億円**（前年同期比26%増）となっている。
- **抹茶**を含む粉末状の緑茶の**需要が拡大**しているほか、**有機栽培茶に対するニーズが高い**。

【緑茶の輸出実績】



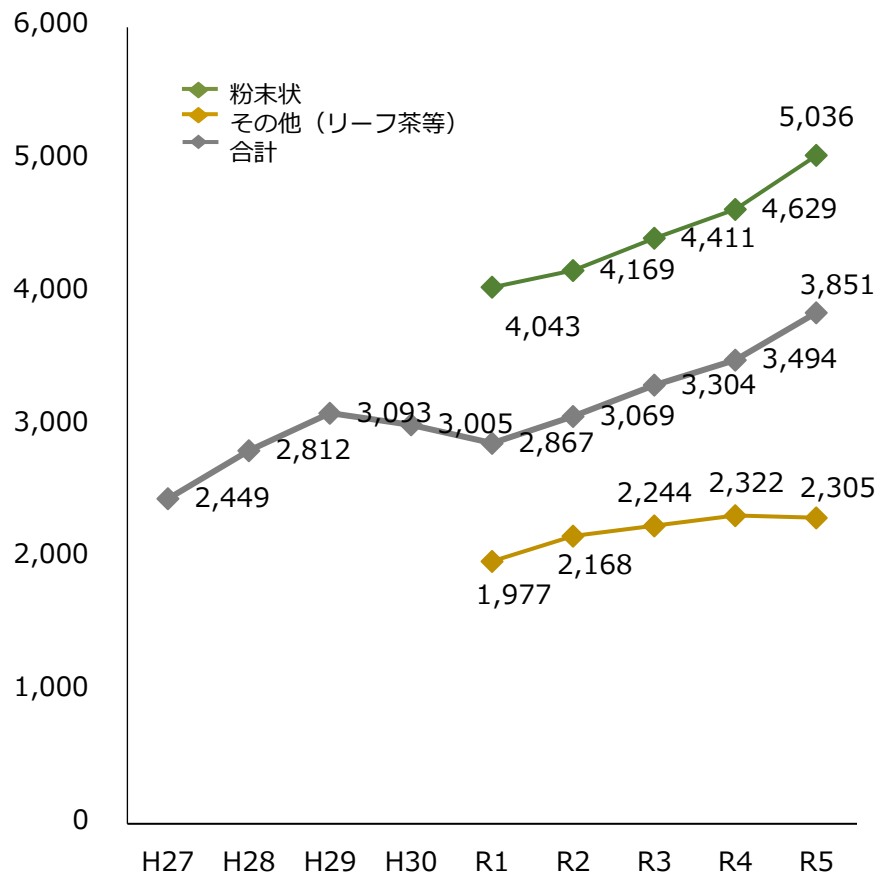
資料：財務省貿易統計

I - 2 - 2 輸出価格

- 全体の輸出価格は上昇傾向であり、特に**抹茶を含む「粉末状の緑茶」**の上昇の影響が大きい。
- 「その他（リーフ茶等）」より「粉末状の緑茶」の方が**単価が高い**。
- 欧米向けの輸出価格が高く、アジア圏への輸出価格は相対的に低い傾向。

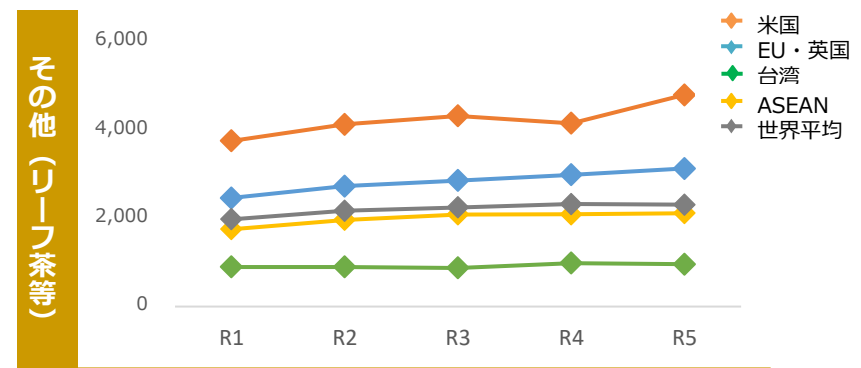
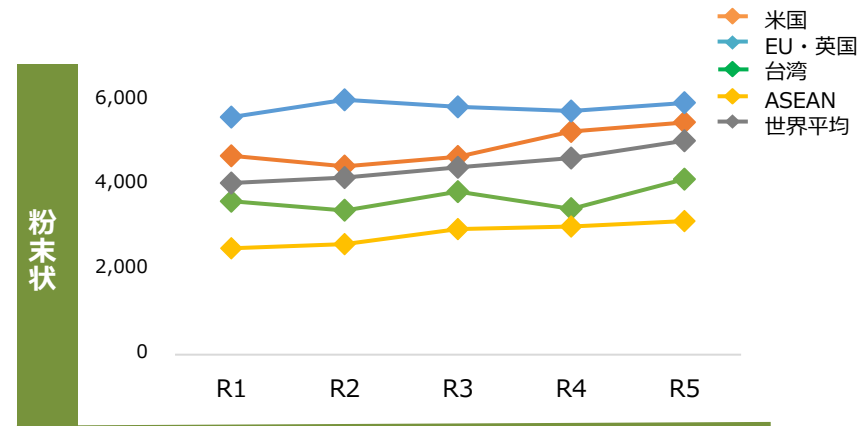
※ 単価（円/kg）＝ 輸出額 / 輸出量

【輸出価格の推移】



※R1以降、粉末状とその他の区分あり

【主な輸出先の価格推移】

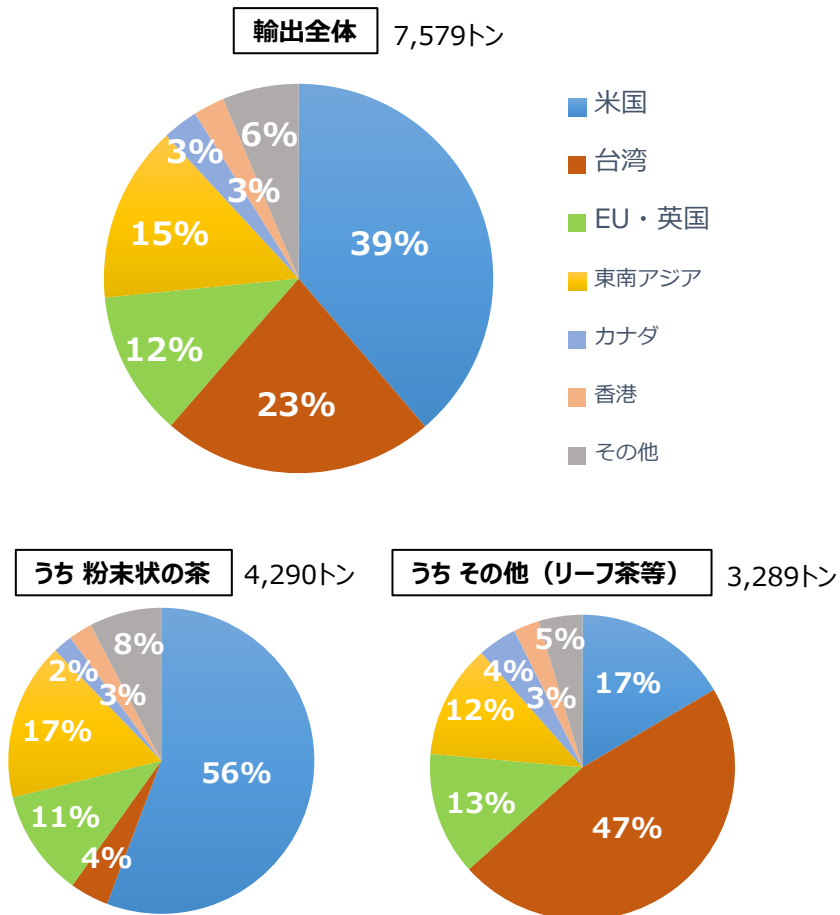


資料：財務省貿易統計

I - 2 - 3 輸出実績の国・地域別内訳

- 輸出先国・地域では**米国**が最も多く（全体輸出量の約4割）、次いで**台湾**が多い（約2割）。
- **米国向け**は主に抹茶オレや製菓等の食品原料として使われる**粉末状茶**が約8割を占める一方、**台湾向け**は**その他（リーフ茶等）**が約9割を占めるなど、輸出先国・地域によって差がある。

【輸出先国・地域別輸出量シェア（令和5年）】



【緑茶の輸出実績（主要輸出先国・地域）】

